慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和四十一年度秋季見学旅行記
Sub Title	
Author	外岡, 和彦(Tanaka, Mikako) 田中, 美香子
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.4 (1967. 3) ,p.141(585)- 143(587)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670300-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和四十一年度秋季見学旅行記

防府、山口、萩方面

第一日（十月二十三日）

九時三十分防府駅前に集合。地元郷土史研究家江村隆雄氏が貸切バスに同乗され、案内して下さる。山陽街道から道は折れて、大型自動車がやつと通れる様な小道を行くと、東大寺別院阿弥陀寺の駐車場に着く。仁王門の仁王像は寄木造り、雄渾である。門を入ると右手に俊乗坊重源以来の湯施行の釜や温室（湯屋）が残つていた。途中の道端に苔むした形の美しい五輪塔もみられた。

阿弥陀寺は重源上人が東大寺再建のために建立された古寺である。本堂から少し離れた収蔵庫には重源上人の寿像があり、檜一木彫で慶派の作品とみられる。又、建久年銘をもつ巨大な鉄宝塔と水晶五輪塔、「東大寺」槌印。そして阿弥陀寺領田畠注文をはじめとする古文書などが展示されていた。そこから毛利邸へ。広々とした庭園があり、屋敷は結婚式場として解放されていて、屋敷内はなるほど立派で一枚板の床間等が随所にみられた。屋敷からみると庭園はいよいよ広く、素晴らしい。ここで昼後、周防国衙址へ。東大寺再興と関係してこのあたり東大寺の勢力下寺域になり、武家の力が及ばなかつたという。志賀瀬田町のものと共に数少い国衙址で昭和三十六年から四年間発掘し、東西国衙、朱雀等の地名、地貌が今日も残つている。

次いで国分寺へ、仁王門は文禄五年に毛利輝元が再建したもので、野菜の浮彫が珍らしい。金堂は二層入母屋造の仏殿で、縁の下には応永年間に焼失した当時の礎石がみえた。藤原時代の薬師如来像、日光・月光菩薩像・四天王像、そして安阿弥様式の阿弥陀如来像など多様な仏像の群立する様は壮観であつた。三時頃防府公会堂着。丁度美術展開催の時で、それらをみながら考古遺物収蔵庫につく。縄文式土器から須恵器まで、そして国衙址出土の中国陶片などが保存されていた。

防府天満宮は原色の華々しい建物である。隣接の収蔵庫には承安年銘の金銅宝塔、平安期一木彫成の大日如来坐像、鎧兜がある。ここで江村氏と別れて大日古墳へ。横穴式古墳で凝灰岩製の家型石棺があつた。

相当盛り沢山の本日の行程を終つて湯田の宿舎〝常盤旅館〟につく。

（外岡和彦）

第二日目（十月二十四日）

山口市内の見学。山口市教育委員会の内田伸氏の案内に依る。貸切バスを使用。

九時五十分、旅館を出発して常栄寺へ。ここには室町末期、大内政弘の代に作られた名苑がある。雪舟庭の通称があるが真偽のほどはわからない。庭はほぼ当初のままを残し、内庭は全面芝生で覆われ、一木も用いずわずかにさつき、つつじを植え込んで山林雲煙を表現している。石はいずれも鋭い線のある石を固めに使つてあるのが特徴で、池泉廻遊式禅苑石庭。本堂には若干の宝物が展示されていた。十一時、今八幡着。ここでバスに別れ徒歩に

よる。今八幡は山口市の氏神で、この地方独特の神社建築の様相を示している。ついで毛利元就を祭る野田神社。そして八坂神社、月山館址へ。昼少し前に、香山公園へ着く。芝生のある広々とした公園で、ここには瑠璃光寺塔がある。檜皮葺の五重塔は珍しい。室町時代の繊細さを加えて全体的に軽快な感じを与える美しい塔だ。昼食後、ここからすぐ近くの、毛利敬親以下毛利家代々の墓を訪ねる。ここの広い石段は特別の仕掛で、柏手を打つとその音が高く響くようになつていた。次いで洞春寺。ここの観音堂は入母屋造、柿葺き唐様の建物で、非常に優美である。堂のまわりに茶の白い花が咲いていた。由緒深い墓も多くある。細い道を辿つて、山口県庁前に残る山口城表門に着く。県立図書館前で一応解散、あとは夕方迄自由行動。希望者のみ、同館内文書館を見学。日本で唯一の県立文書館で、昭和三十四年に誕生して以来、精力的な活動を続けて、学界の注目をあびている。宿舎山口市「かめ福」のすぐ近くに高田公園がある。ここはもと、高田御殿といわれ、井上馨の生家のあつた所で、幕末多くの志士達がここを訪ねたという。八月十八日政変の七卿に関する記念碑もある。

第三日目（十月二十五日）

宿舎を九時、バスで出発。秋吉洞及び台を見学。長門に向う途中、大田絵堂戦跡記念碑を車道左側に見る。高杉晋作ら、長州藩が幕末、賊論党と正論党とに分れて戦つた所である。しばらく行くと、滝沢という所を通過した。ここは山陽山陰の境目にあたり、同行の伊木寿一先生の故郷。今はバスの通うこの道を、かつて先生は、足駄を鳴らして山口の高校へ通われたという。大きな松の木のある先生のお宅が車窓越しに見られた。

青海島を巡つて大寧寺へ。正しくは瑞雲山大寧護国禅寺と称し、石屋真梁禅師開山の由緒を持つ曹洞宗の名刹。応永十二年（一四一〇）の創建。大内義隆自刃の址、鷺頭弘忠、上杉憲実の墓所などがある。長門湯元の宿舎「大谷山荘」に着いてから希望者のみ近くにある萩焼の窯元を訪ねる。

第四日目（十月二十六日）

宿舎九時バスで出発。同四十分、村田清風旧宅着。亨和元年十九歳迄と晩年をここで生活した。邸内には、彼の晩年開設した私塾の尊聖塾や、籾貯蔵庫等が残つている。そばに清風館ががあり、著書、遺品、文庫、其他系図、肖像、年表等が陳列されている。

工事中の道路にあえいで、ようやく萩城址へ着く。萩城は指月山を背後に、萩の海岸を前面に控え、慶長十三年以来十三代二百六十年余にわたつて毛利氏の防長統治の首都であつた。萩市は城下町であると共に寺町で、現在は人口六万だが幕末の最盛期には十万を数えたという。

次に、松下村塾。この小さな塾が明治維新期の立役者を数多く生んだのだ。横に松陰の遺墨展示館が作られている。

反射炉は、韮山、水戸と並んで全国に三ケ所しかない珍しいもの。ここから明倫館へ行く途中には、しだれ桜の名所南明寺がある。明倫館址は現在小学校となつているが、その校内にいくつか

遺構を残している。八代毛利義元創設の有備館は荒廃しているが、旧時の民具等が保存されている。騎馬戦の訓練に用いられた明倫館水練池。この周囲、昔は一面の蓮田であつたという。

最後の見学場所である熊谷(くまや)美術館に着く。ここは、明和五年(一七六八)に初代熊谷五右衛門芳充が建築した土蔵の内部を改造したもので地方美術館として特色を持つている。日本最古のピアノ、古萩陶器、茶道具など貴重なものが多く展観されている。

萩市には歴史的に貴重かつ興味深いものがとても多く、又、家並みも昔そのままを伝えており、一日位ではとても見きれない程であるが、我々の見学旅行は一先ずここで終わり東萩駅で解散した。

(田中美香子記)

三田史学会大会

昭和四十一年十月十五日
於慶応義塾大学三田西校舎五一九番教室
学術講演
◆ヴェルフリンとパノフスキー
—システィーナー礼拝堂天井画の解釈をめぐって—　高橋　巌氏
◆縄文土器にみられる蛇身装飾について　野口　義麿氏
◆時代と歴史観　今宮　新氏

彙報

学会報告
記録映写　竹田　竜児氏
◆中近東の旅から
終了後、西校舎学生食堂ホールに於て懇親会が開かれた。

三田史学会例会

昭和四十二年二月二日
昭和四十一年度卒業論文発表会
於三田一二一番教室(国史)
於三田一〇三番教室(東洋史)
於三田五三一番教室(西洋史)
卒業生送別会
於三田西校舎学生食堂

国史談話会

昭和四十一年十二月十一日
都内見学旅行(円融寺・五島美術館・上野毛古墳・亀甲山古墳・九品仏)

東洋史談話会

昭和四十一年十二年十六日　於三田一一一番教室
○学術講演(言語文化研究所と共催)
香港の水上生活者—蛋民—　可児　弘明氏